

平成 24 年度活動報告

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
高田 明

1. 自分自身の研究テーマについて

南部アフリカの狩猟採集民として知られるサン(ブッシュマン)をおもな対象として、次の4つの領域において研究を進めてきた。(1)養育者－子ども間相互行為、(2)生業や人口構造と養育者－子ども間相互行為との関わり、(3)環境認識、(4)エスニシティの変遷。さらに、これらの研究を関連づけて、サンの社会的相互行為を組織化する文化的構造を明らかにしようとしている。平成 24 年度の派遣目的は、ボツワナ等でのコラボレーション調査、アウトプット研修を推進することを通じて、総合的コミュニケーション研究という観点から上記の研究を理論的に深化させ、関心を共有するさまざまな国の研究者と議論を行うことである。

2. 派遣の内容

(1)ボツワナ・南アフリカ・シンガポール派遣（平成 24 年 8 月 1 日～10 月 10 日）

平成 24 年 8 月 1 日から 10 月 10 日にかけて、おもにボツワナのボツワナ大学、さらに南アフリカのケープタウン大学、シンガポールのシンガポール国立大学を訪問して研究活動を行った。

ボツワナ大学では、アフリカ言語・言語学部の附属研究員として所属し、サンの子育てと言語的社会化、発達の語用論について共同研究を行った。具体的には、ボツワナ大学のアフリカ言語・言語学部やサン研究センターを構成する教員らと上記のテーマについて日常的に議論を行ったり、上記のテーマに関連してボツワナ大学が所蔵する豊富な資料を用いた研究を行ったり、報告者が 1990 年代後半からフィールドワークを行ってきたニューカデ村で上記のテーマに関する調査を行ったりした。



写真 1 ボツワナ大学キャンパス



写真2 ポツワナ大学での研究

ケープタウン大学では、コイサン諸民族のジェスチャー研究に関する資料収集を行うとともに、人類学・言語学部で“Semantics on senses of the G|ui and G||ana”および“Fieldwork and conversation analysis”というタイトルで授業を行った。ケープタウン大学は、自然科学、人文社会科学のいずれにおいてもアフリカではトップクラスの人気を誇る。南アフリカ以外にもアフリカ大陸の様々な国、東アジア、東南アジア、南アジアから優れた学生が集まっており、授業では上記のテーマについて非常に刺激的な議論を行うことができた。



写真3 ケープタウン大学キャンパス

シンガポール国立大学では、共同研究者でもある日本研究学部の森田笑助教授らと総合的コミュニケーション研究に関する研究打合せ、および同テーマに関する資料収集を行った。これにより、最新のコミュニケーション研究の動向における自分の研究の位置

づけを再確認し、今後の研究の展開について新たな見通しを得ることができた。

(2)米国・インド派遣（平成 24 年 11 月 13 日～12 月 2 日）

平成 24 年 11 月 13 日から 12 月 2 日にかけて、米国およびインドを訪問した。

米国ではサンフランシスコ・ヒルトン・ホテルで開催された第 111 回アメリカ人類学会に参加し、“Re-enacting birth: The spread of the chebama ritual among the G|ui and G|lana” というタイトルでの発表、および Frederick Klaitz デューク大学講師とボツワナの教育環境に関する研究打ち合わせを行った。また学会終了後は前年度に客員研究員として滞在したロサンゼルス の UCLA 言語・相互行為・文化研究センター(CLIC)を再び訪問し、Charles Goodwin 教授らと社会的相互行為に関する研究打ち合わせ及び資料収集を行った。

インドでは、オリッサ州ブバネシュヴァルのカリング産業技術研究大学で開催された IUAES 2012 国際会議 Children and Youth in a Changing World に参加し、“Responsibility formation in directive sequences between Japanese caregivers and children” というタイトルでの研究発表、およびドイツのオスナブリュック大学の Heidemarie Keller 教授ら乳幼児のコミュニケーション発達に関する研究打ち合わせを行った。

以上を通じて、報告者の調査・研究に関連する最新の動向やその研究史における位置づけ、今後の研究協力について有益な議論を交わすことができた。



写真 4 IUAES 2012 国際会議 Children and Youth in a Changing World

(3)ザンビア派遣（平成 24 年 12 月 25 日～平成 25 年 1 月 7 日）

平成 24 年 12 月 25 日から平成 25 年 1 月 7 日にかけて、ザンビア大学社会経済研究所（同アフリカ研究所から改組・改名）での総合的コミュニケーションおよびザンビアの教育政策に関する資料収集、同研究所の Richard Zulu 教授との同テーマなどに関する研

究打ち合わせ、ルシツ周辺村での社会変容と子どもの社会化の関連に関するフィールド調査を行った。ザンビア大学の社会経済研究所は英国の実用人類学の拠点として設立されたローズ・リヴィングストン社会調査研究所を前身とし、植民地期からの多くの貴重な資料を所蔵している。今回の訪問では、Zulu 教授から研究所の歴史や現状について貴重な話を伺うことを通じて、アフリカ研究の歴史の重みを感じることができた。またルシツ周辺村でのフィールドワークを通じて、上記のテーマに関するザンビアの特殊性と南部アフリカ全般に通じる共通性の双方について洞察を得ることができた。



写真 5 ザンビア大学社会経済研究所にて、Richard Zulu 教授と報告者

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

ボツワナでは、ボツワナ大学のメインキャンパスのあるハボローネに長期滞在した。報告者はボツワナで博士研究以来約 15 年間にわたってニューカデ村などで現地調査を続けてきたが、首都での長期滞在はこれまでほとんど行ってこなかった。今回の首都滞在中を通じて、報告者が博士研究以来研究対象としてきたサン（狩猟採集民／先住民として知られ、ボツワナでは圧倒的なマイノリティである）が都市部でどのように見られているのか、またボツワナの多数派をしめるツワナの文化や社会に関して、貴重な経験や資料を得ることができた。さらに、ボツワナ大学で長期にわたって滞在中で、ボツワナ大学のさまざまな分野を専門とする研究者やボツワナを調査・研究のために訪問した研究者とじつに有意義な研究上の交流を行うことができた。

4. 目的の達成度や反省点

平成 24 年度は、平成 23 年度のボツワナ滞在中に訪問した NGO、政府、国際機関、調査地などとの関係をさらに強化し、さらにこれらの機関、個人の相互のリンクをはかることを通じて、ボツワナでのコラボレーション調査、アウトプット研修をさらに推進

した。また、本プロジェクトによる米国等への派遣で培った社会的なネットワークをさらに強化するとともに、その研究活動の成果を世界に向けて発信していくことをねらって、報告者の研究に関連する国際学会や国際シンポジウムに積極的に参加し、研究発表を行った。

さらに平成 25 年 2 月には、本プロジェクトの最終成果の 1 つとして、報告者が中心となって京都で“**Vitalizing indigenous knowledge in Africa**”というタイトルの国際セミナーを企画・開催した。このセミナーでは、本プロジェクトを通じて研究上の交流を深めてきたボツワナ大学の **Herman Batibo** 教授および **Maitseo Bolaane** 博士を招聘し、同テーマと関連づけた研究発表をしていただいた。また、本プロジェクトの主担当研究者である **ASAFAS** の梶茂樹教授、アフリカ地域研究資料センターの木村大治教授にもご登壇いただいた。報告者は“**Studies on indigenous knowledge of San-speaking people: Achievements and perspectives of Japanese scholars**”というタイトルで研究発表を行うとともに、セミナー全体の司会・進行役も務めた。この企画・運営を通じて、アフリカにおける在来知を調査、蓄積、活用していくために有益なさまざまな事例についての知見を得るとともに、これに関する深い議論を行うことができた。また、海外から研究者を招聘する際のスケジュール調整や参加者間のテーマのすりあわせ、セミナー当日の実務、セミナーの成果をとりまとめていく（セミナーの成果は、本プロジェクトの最終報告書に論文形式で掲載することに加えて、これを修正・加筆して学術雑誌の特集号として出版することを検討中である）ための手続きなどについて、貴重な経験を得るとともに、多くを学ぶことができた。

これらによって、前年度に設けた課題や目標（これまでに交流してきた研究者や研究関連機関、調査地などとの関係をさらに強化し、さらにこれらのリンクを深めることを通じて、コラボレーション調査、アウトプット研修をさらに推進する）はほぼ達成し得たと自負している。